

「組織的な若手研究者海外派遣事業」における海外活動報告書

代表者(大学院生)	専攻	社会環境医学専攻
	ふりがな氏名	吉松 昌司 (よしまつ しょうじ)
	研究分野	バングラデシュの重症低栄養児における重症感染症罹患時の低リン血症と重症度の関係
活動目的	(1) 共同研究	
共同研究等課題	下痢症・敗血症・敗血症性ショックを合併した重症低栄養児における低リン血症についての研究	
共同研究機関、相手代表者	相手国研究機関：国際下痢症研究センター (International Centre for Diarrhoeal Disease Research, Bangladesh: ICDDR,B) 相手代表者：Tahmeed Ahmed, ICDDR,B 臨床医学部門小児保健分野主任研究員、栄養プログラム長	

実施期間：平成 22 年 3 月 31 日～7 月 31 日

活動目的：ICDDR,B の関連病院であるダッカ病院にて、博士課程研究課題である「下痢症・敗血症・敗血症性ショックを合併した重症低栄養児における低リン血症についての研究」を開始する。

活動内容：

①Research Physician(1名), Research Health Worker(2名), Research Assistant(1名)の訓練

本研究実施のために雇用した Research Physician(1名), Research Health Worker(2名), Research Assistant(1名)に対し、研究内容の説明、各自の役割を説明し、約 2 週間訓練を行った。

②研究開始

ICDDR, B 倫理委員会の承認は既に得ていたため、Research Physician, Research Health Worker, Research Assistant の訓練終了後、平成 22 年 4 月 19 日より研究開始、患者の採用を開始した。

③患者情報の収集

研究プロトコールに従い、患者保護者に承諾を得た後、質問票を用いて、症状経過・身体測定などの患者情報を収集した。

④検体収集・計測

研究プロトコールに従って採用患者から血液・尿検体を採取した。採取した検体は、匿名化シラベリングを行ったうえで、-20℃の冷凍庫に約 1 ヶ月間保存した。保存した検体は、約 1 ヶ月毎に ICDDR, B の Nutrition Biochemistry Laboratory にて研究プロトコールに従って、リン、カルシウムなどの項目を測定した。

⑤データ収集・保存

先に述べた症状経過・身体測定結果などを含んだ質問票からのデータと、血液・尿検体の測定データは、SPSS を用いて集計、保存した。

⑥活動成果

重症低栄養児 18 名、非重症低栄養児 10 名から血液・尿検体を収集し、測定することができた。また雇用

した Research Physician(1名), Research Health Worker(2名), Research Assistant(1名)は、本活動期間内に、研究内容を良く理解し、患者の採用・検体採取を問題なく行えるようになった。また、Nutrition Biochemistry Laboratory においても、検体測定を適切に行えることが確認された。以上によって、本研究の軌道が築かれ、研究活動が継続的に行えるようになった。

活動のまとめ：自身の博士課程のテーマである「下痢症・敗血症・敗血症性ショックを合併した重症低栄養児における低リン血症についての研究」のため、度々 ICDDR, B を訪れ、研究開始の準備を進めてきた。本事業によって、計 4 ヶ月間現地に滞在することができ、その間に共同研究者との研究会議、Research Physician, Research Health Worker, Research Assistant の訓練を行い、本研究を開始することができた。本期間に採用できた患者数が、まだ必要数に満たないため、今後も研究を継続する必要がある。しかし、本事業によって、Research Physician, Research Health Worker, Research Assistant を十分に訓練することができ、また現地共同研究者との信頼関係をさらに深めることができた。それらの結果、現地共同研究者のもとこれらの Worker によってデータ収集が滞りなく行われることを確認でき、今後の研究活動の基礎を築くことができたのが一番の成果である。

その他の成果としては、途上国をフィールドとすることによる貴重な経験ができた事が挙げられる。研究フィールドが途上国ということで、経済面・設備面の制限、また異なる生活習慣・文化を肌身に感じながらの活動であった。研究開始前から様々な問題に直面したが、現地共同研究者が、適切なアドバイスを下さり、一つ一つ克服しながらの地道な研究活動であった。思うように行かないことが多々あったが、現地の研究者やスタッフ、患者から学ぶことが多く、自分の研究活動、生活スタイルを見つめ直すよい機会にもなった。

また、同期間において途上国における診療・研究を経験し、日本ではまず経験することのない、重症低栄養児の診断・治療・フォローアップ、コレラ・赤痢など消化器感染症・小児結核などの経験をすることができ、今後の研究課題を発見する良い機会となった。

今後としては、この小児低栄養研究を継続するとともに、小児結核などバングラデシュを始め、途上国の診療現場で問題となっている疾患について臨床研究活動を継続していく予定である。

